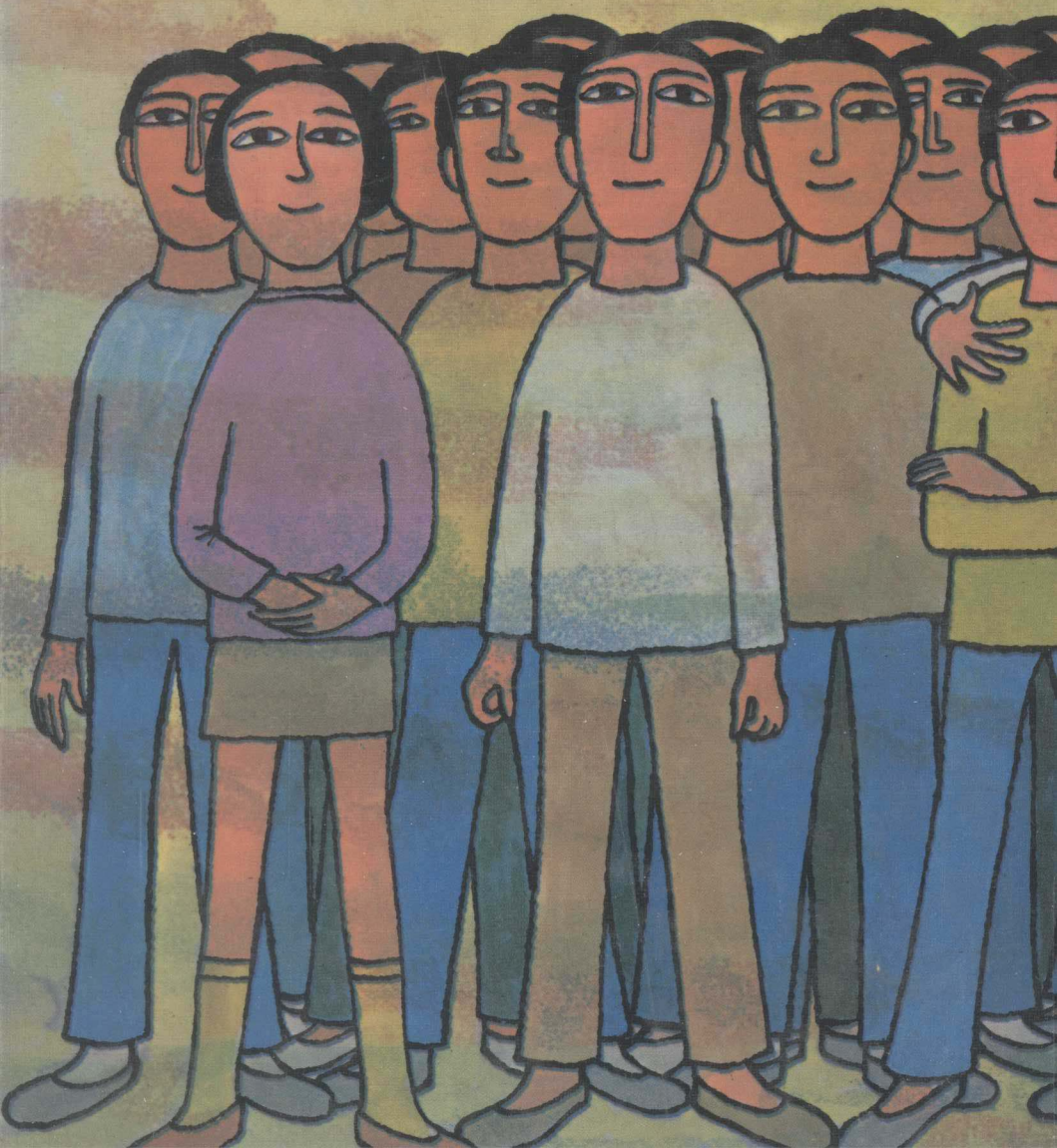
おれたちの夢

香川　茂・作　大古尅己・画



おれたちの夢

香川　茂　作

大古尅己

NDC 913

香川（かがわ） 茂（しげる）
おれたちの夢
ポプラ社 1973年
230p 21cm （創作ブックス 5）

8093-016005-7764

著者との話し合いにより検印廃止

創作ブックス ⑤

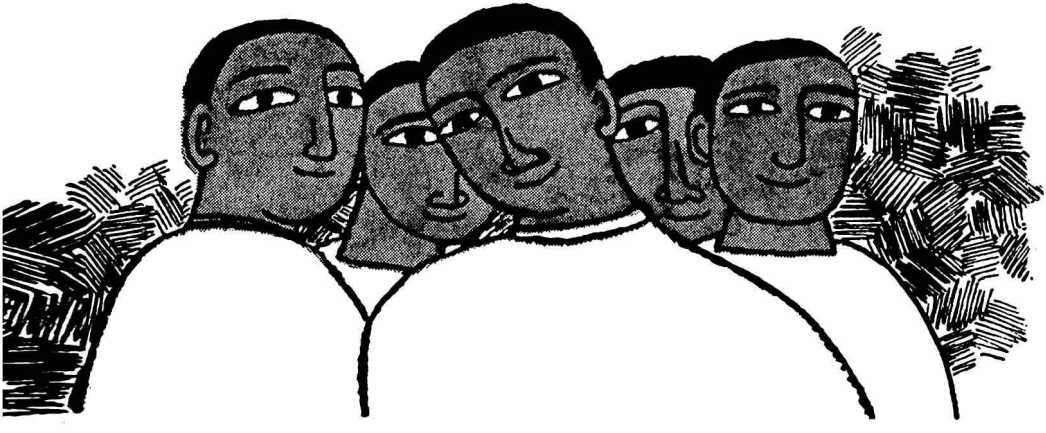
おれたちの夢

著者 香川 茂
発行 昭和48年3月30日 初版©
昭和48年7月30日 再版
発行者 久保田忠夫
発行所 株式会社 ポプラ社
東京都新宿区須賀町5
TEL(357)2211(代)

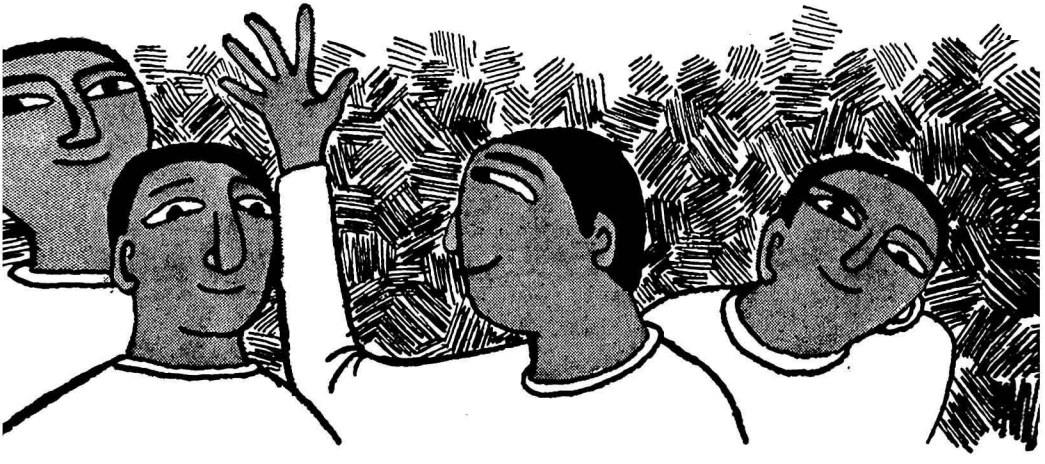
印刷 新興印刷製本株式会社
製本 石井製本工場

落丁本・乱丁本はいつでもおとりかえします
定価は箱の裏に表示してあります

もくじ



お金のワルツ／7
ダビデさん／23
三味線島へ／49
ハゲ／73
フォックス／93
蛇の目の子／113



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ナポレオンと赤いがま口／127
ぞうきん／151
◇
天満の火／171
下田の小舟／187
言海物語／201

■著者紹介■

香川　茂

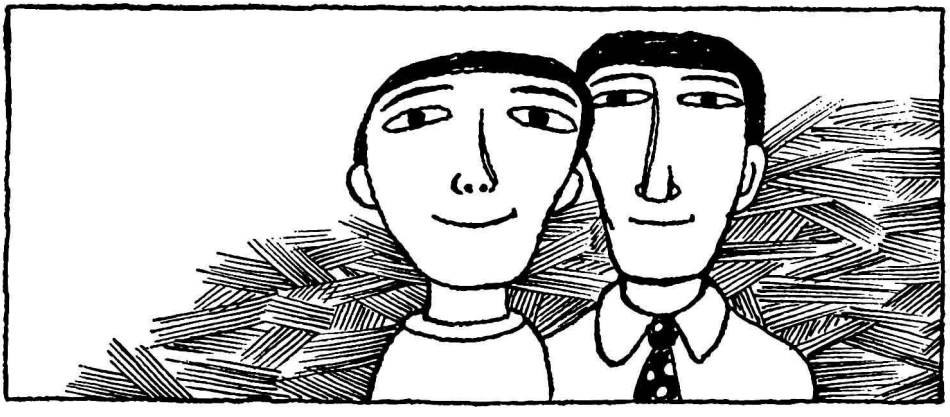
1920年，高松市に生まれる。香川師範学校を卒業。現在，日本文芸家協会，日本
文芸家協会，日本児童文学者協会に所属している。主な著書に，「南の浜にあつま
「セトロの海」（第５回野間児童文芸賞）「赤いシャッポのふたり」などがある。

大古尅己

1936年，奈良県に生まれる。桑沢デザイン研究所卒業。デザイン関係のしごとの
イラストレイターとしても，ひろく活躍。主な作品に，「コルプス先生馬車への
「赤いシャッポのふたり」「四つ目のハッピー」「ほらふきマックス」などがあ

おれたちの夢

お金のワルツ



なんちゅうツラだ、この顔は。
ぼくは鏡を机のひきだしにもどした。
ぼうず頭をガリガリかくと、フケがパラパラこぼれた。
やっぱり金だ。
金をためよう。
それがいちばんだ。
通信簿には、とっくに失望しているし、顔にも自信がない。のっぺらぼうみたいな——
そうだ、夏目漱石の「ぼっちゃん」の中にでてくるうらなり先生みたいだ——何となく陰気で、はっきりしないぼくの目、鼻、口。
いったい、これで、金がなかったらどういうことになるんだ。何のとりえもない人間として、とりのこされてしまうじゃないか。
しかし、金さえあれば、金の力で、友だちをあつめることもできるし、女の子だって、きっとついてくるはずだ。
あの「杜子春」をみろ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あいつはバカだ。
せっかく仙人が大金持ちにしてくれたのに、風呂おけから湯をおとすように、ザーザー、シャーシャー使っちまうなんて。
ぼくなら、がっちり栓をしめておくのになあ。
では、いったい、どうやって金をためるのか。
ぼくは、ドンと机をたたいた。
盗むんだ！
ぼくはぞくぞくしてきた。尻がフアフアしてきた。心臓がゴトスカ鳴りだした。
どこから盗むんだ。だれの金を盗むのだ。
あねごの金を盗め！
うあーい、と、ぼくは心の中で叫んだ。

○

一万円さつは手ごたえのある大きさだ。しゃくにさわるので両手でくしゃくしゃにまるめてやった。だんごになった一万円さつを、右手にぎゅっとにぎりしめてから指をひらいた。

てのひらの中、一万円さつのつぼみはゆっくりと、かすかに、カサカサと音をたてながら開きはじめた。だんだん速くなり、すーっと四方にはじけて、もとのような、長方形の花になった。ぼくは、ディズニーの映画の中で、砂漠のサボテンの花がゆっくりゆっくり開いていった場面を思いだす。あのとき、ぼくはあまりの美しさに息もできないぐらいだった。

いま、ぼくは、みごとに開いた一万円さつを見て、同じような感動にとらわれている。

ぼくはダンボールの箱の中に右手をつっこみ、バラ銭をつかみとる。一円、五円、十円、五十円、百円がざくざくつまっているのだ。その、ひゃっこい硬貨の感触。ぼくはしびれちゃう。

ぼくは壁にむかって、

「えいっ！」

と、金をなげつけた。

チャラン、チン、チン、チン

壁はステレオのスピーカーになって、一瞬の交響曲をかなでた。

すると一万円さつがひょこっと立ち上がった。一万円さつは、スローテンポでワルツをおどりはじめた。

「ワルツをどうぞ。」

ぼくは、一万円さつにうながされたので、さっそくハミングで、ワルツをやりはじめた。

「伴奏がほしいわ。」

一万円さつのことばに、ぼくは、おやと思う。

なんだ、一万円さつは、じいさんかと思ったら、女の子じゃないか。

ひげをはやした、いかめしいじいさんは、花の少女の笑顔になって、三拍子でまわりながら、ぼくにほほえみかけた。

「ナイス！」

ぼくはパチンと指をならし、ヒューと口笛をふいた。

ぼくは、さっそくプラモデルのウクレレを手にとり、プンポッポ、プンポッポと、ひきはじめた。プラモデルだなんて、ばかにしてはいけない。ほら、こいつは、ほんもののように、鳴るんだ！

「ドラムをどうぞ。シンバルをいれて。」

一万円さつの声はなんてすばらしいんだろう。ぼくは、すぐ

に右足をダンボールの中につっこみ、硬貨たちをはねとばした。

ジャラン、チン

ジャラン、チン

プンポッポ、プンポッポ

ぼくはかっかとのぼせてくる。頭の中がふっとうして、ボカボカと泡だってくる。

おどれ、おどれ。べっぴんさんの一万円さつ。

○

ぼくのおやじは鉄道員。紺のサージに、金ボタンのよれよれの服をきて、機械みたいにはたらいているおやじ。かあちゃんは、すっかりババアくさくなり、朝から晩までエプロンすがたで、かさかさの手。弟は野球きちがいのハナタレ小僧。

あねごは、でっかいケツをふりふり、まっかなハイヒールで会社へおでかけ。

「あたしね、ゆめがあるのよ。」

それがあねごの口ぐせだ。

「あたしね、ゆめがあるのよ。」

へん、何がゆめだい。どうせ、あねごのゆめなんて、あのノッポ野郎のところへ、およ

めにいくことだけなんだろう。すこしばかり頭がよくて、きりょうよしだからといってのぼせるんじゃない。

ぼくは、あねごをすきでない。

まず、かっこうがよすぎる。ケツはたしかにまるくてでっかいが、足がすらりとしてながい。長いまつげのきれいな二重まぶたが、しゃくにさわる。ぼくの目は細くて一重で、すこし目じりがさがってだらしがない。あねごの目はいまいましい。

そのつぎはケチなことだ。映画代せびっても、なかなかよこさない。月給もらってるくせに、何のかのとかあちゃんにせびっているのだ。いったい、あねごの月給やボーナスはどうなっているのだろ。

きっと、しこたま、ためこんでいるにちがいないと、ぼくはにらんでいる。

だからこそ、ぼくは、あねごをねらうのだ。

とうちゃんは金欠病の重症患者だ。だって、いつでも、かあちゃんにサイフの底までしぼりとられているからだ。

しかし、そのかあちゃんは、ぼくたちきょうだいにしぼられている。だから、かあちゃんもびんぼうとみていい。

けっきょく、金を持っているのは、あねごだけということになる。

他人の金を盗むのはおっかない。
つかまったらたいへんだ。かあちゃんのサイフをねらうのはかわいそうだ。
しかし、あねごならかまわない。
「あたし、ゆめがあるのよ。」
へん、あねごのゆめなんかくたばっちまえ。およめいりのゆめなんか、ぼくの知ったことか。
「よし、やるぞ。だんぜん、ぼくはやる！」
ところで、いったい、あねごは、どのくらい金を持ってるのだろう。
ぼくは、それとなくかあちゃんにあたってみた。
「ねえ、かあちゃん。ねえちゃんは、ずいぶん貯金してんだろうなあ。」
「あら、どうして。」
「だってさ、およめにいくんだから、貯金してないとこまるじゃないか。」
「そりゃ、およめにいくにはお金がかかるわよ。うちはびんぼうだから、自分で働いてせっせとためておいてもらわないとこまるわよ。」
「ねえちゃんは親孝行だから、ちゃんと貯金してるさ。」
「その点はね、あの子、利口だから、ぬけめがないと思うわ。もう四十万やそこらは持っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com